佳作

祖父の笑顔の裏側には

兵庫県　姫路市立高浜小学校六年　福永　美咲

私の祖父は胃袋がありません。昨年の秋に体調をくずし、突然入院することになりました。検査の結果はレベル三の胃がん。七十七歳という高齢ですが胃袋の全摘出の手術をすることになりました。手術が怖いようではなかったけれど表情は明るくありませんでした。手術は無事に成功したけれど、術後には体重が六十五キログラムから四十五キログラムまで減っていました。みるみる小さくなっていく祖父に私は悲しい気持ちになりました。しかし、祖父はいつも明るく笑顔でした。なぜだったのでしょう。

私は筋肉が落ちしわしわの皮ふをしている姿に不安になり、祖父の一日の行動を観察することにしました。

朝はバナナとバターロール一個。十時にあめ玉一個とクッキー二枚。お昼はうどん五十グラム。十五時はカステラ一枚と自作ジュース五十ミリリットル。夜はごはん五十グラムと魚四分の一切れを食べていました。手術する前の半分以下の食べ物をよくかみ三十分かけてのどに流しこんでいました。腸へ負担をかけないように、早く食べないように。

そんな時、祖父が言いました。

「食べることはトレーニングなんだ。」

私は、なぜ祖父が明るく笑顔なのか少し分かった気がしました。また、祖父は、

「今できることは、食べることができる食品を自分で見つけ調理し、前向きに一日一日を過ごすことなんだ。」

私は、胃袋があることが当たり前で普段食べることに困ったことはないです。食べられないことは、つらいと思われがちですが、祖父の自分なりに工夫している姿を見て病人だからという決めつけをしてはいけないと感じました。

私にできることは何でしょうか。とても悩み、行動したことは、修学旅行へ行った時のお土産に祖父のためにドーナツを買ったことです。カステラは食べることができると母から聞いていたのでドーナツも食べられる気がしました。お土産を祖父に渡すと、とても喜んでくれて毎日食べてくれたそうです。

胃袋がないということは、食べる食品が無いのではなく、消化によい材料を選び調理し、時間をかけてゆっくりとかむことで、生きるために必要な栄養素を体に取りこんでいくということでもあります。

私は、祖父とまだまだ一緒に居たいし、祖父が作ってくれる畑の野菜を食べたいです。そのために、祖父には元気に生活してほしいし、もっとたくさん食べられる食品を増やしてほしいです。なので、よく話をして祖父が何が食べることができるのか、相手を思いやる心を育てていきながら、一緒に食事ができるようになりたいです。